愛顔（えがお）の生きもの100年レター

愛媛県生物多様性ニュースレター
vol.3
（平成31年1月）

世界中で愛媛だけの花「トキワバイカツツジ」

「トキワバイカツツジ」と言うツツジを皆さんはご存知ですか？

ツツジは庭園や街路樹でよく見られる馴染みの植物で、日本には「クルメツツジ」や「江戸キリシマ」「ヒラドツツジ」など数えきれないほどの園芸品種が存在しますが、愛媛県宇和島市に、世界中でそこだけにしか自生しない希少種があることは県内でもあまり知られていません。

本種は、1984年に宇和島市の山中で見つかり、国内には近縁種のないバイカツツジ亜属の新種と確認され、「トキワバイカツツジ」と命名されました。春に、写真のような薄紅紫色の花をつけ、ほのかな芳香がある花が特徴です。

県の「特定希少野生動植物」に指定されているため、採取や損傷等は禁止されており、自生地から持ち帰って栽培することはできませんが、花の季節に、その多くが自生する国有林の登山道や遊歩道から鑑賞することは可能です。

貴重な固有種を保全し大切に守り育てるため、まずはその存在を知っておいてください。

トキワバイカツツジ開花（拡大）　2016年4月26日　生物多様性センター撮影

CONTENTS

○【図鑑】トキワバイカツツジ
○【TOPIC外来生物】カミツキガメ
○【特集】愛媛県に生息する淡水性カメ類
○【希少野生動植物】オオキトンボ
○【紹介】愛南探検隊

図鑑 トキワバイカツツジ

トキワバイカツツジは、ツツジ科バイカツツジ亜属トキワバイカツツジ節に属する常緑低木で、宇和島市の限られた地域の渓流沿いや林内、林縁のみに生育しています。近縁種は中国、ビルマ北部、チベット南部、台湾などに生育しており、地理的にも近縁種から隔離されていることや、園芸的栽培が可能で一般的な里山環境に自生するにもかかわらず、野生集団が宇和島市の１ヶ所だけであることなど、その分布域に謎が多い植物です。

花期は４月下旬から５月上旬で芳香性がある花をつけ、淡紅紫色の花冠には上側内面に濃色の斑点があり、種子を含んでいる蒴果は楕円形で腺毛が生えています。本種は園芸的価値があり、その希少性から盗掘・採取による個体数の激減や自生地の環境変化による生育環境の悪化が懸念されています。

生育地が限定的であることと、個体数が少ないことから、環境省（2017）のレッドデータリストでは絶滅危惧IB類（EN）、愛媛県（2014）では、絶滅危惧IA類（CR）にランクされている希少種です。

本種は、1984年の原記載から30年以上経過したにもかかわらず、自生地へのアクセスが非常に悪いため生態学的・分類学的な基礎的な情報が不足しており、生物多様性センターでは、種の保全を図るため、国や県内外の研究機関と連携して、生育特性や適地、訪花昆虫相など保全に向けた調査研究を進めています。

トキワバイカツツジの花に訪れる
キムネクマバチ
2017年５月　橋越清一撮影

トキワバイカツツジの播種試験
生物多様性センター撮影

参考文献／早川宗志・徳岡良則・橋越清一，2015. 愛媛県宇和島市固有種トキワバイカツツジ（ツツジ科）の系統的背景と訪花昆虫．エヒメアヤメ（愛媛植物研究会誌），(46): 6-12.
高等植物分科会，2014. トキワバイカツツジ．P.406.In.愛媛県レッドデータブック改定委員会（編），愛媛県レッドデータブック2014　Red Data Book Ehime　愛媛県の絶滅のおそれのある野生生物．623pp.，愛媛県県民環境部環境局自然保護課．
環境省自然環境局野生生物希少種保全推進室，2018.【維管束植物】環境省レッドリスト2018.PDF版．https://www.env.go.jp/press/files/jp/109278.pdf.　2018年12月17日アクセス.

TOPIC 外来生物　カミツキガメ

原産地：カナダ、アメリカ合衆国、中央アメリカ他

1960年代以降、アメリカ合衆国から日本にペットとして輸入されたのが始まりです。大型になり飼いきれなくなった個体が遺棄され、天敵も少ないことから国内の一部で定着しており、特定外来生物に指定されています。水中での生活が中心で人に危害を与える可能性は低いものの、産卵時期に上陸した個体は不用意に触ると威嚇、攻撃することもあるため注意が必要です。

- ■産卵時期：５～６月
- ■産卵回数：１回/年　75～95日で孵化
- ■産卵数：背甲長20㎝→20個程度、背甲長30㎝→30個程度
- ■成熟サイズ：背甲長17㎝（生後５～６年必要）
- ■成長速度：３齢までに急激に成長
- ■繁殖の可能性が高い都府県：千葉県、東京都、静岡県、神奈川県、大阪府、愛媛県

1991年以降、ペットの放逐が疑われるカミツキガメが断続的に確認されていました（表１）。2017年以降、今治市の島嶼部において複数の成体が目撃、捕獲されたことを受けて生物多様性センターでは、2018年から今治市、とべ動物園と合同で、カミツキガメの捕獲調査を行っています。

■調査方法：カメ用トラップによる捕獲および踏査による産卵可能域の把握

■調査結果

2018年の捕獲数は10頭でした。７月27日と８月14日に幼体が捕獲され当該地域での繁殖の可能性が高まりました。

■今後の対応

繁殖初期段階と考えられるため、数年間の捕獲を継続することで成熟個体の当該地域からの除去による産卵抑制を図り、将来的には根絶を目指した取り組みを継続していきます。

表１ 愛媛県内におけるカミツキガメの野外確認状況＊

年・月	場所	頭数
1991・1	新居浜市	1
2000・9	不明	1
2004・5	松山市	1
2005・5	松山市	1
2005・12	松山市	1
2006・6	今治市	1
2006・7	今治市	1
2006・9	松山市	1
2007・7	今治市	1
2011・-	東温市	1
2013・5	伊予市	1
2017・6	今治市	1
2017・7	今治市	1
2018・3	今治市	1
2018・5	今治市	2
2018・6	今治市	2
2018・7	今治市	3
2018・8	今治市	2

＊新聞報道、関係機関聞き取り、捕獲実績に基づく概数

特集 愛媛県に生息する淡水性カメ類

淡水性カメの多くはため池や河川を主な生息場所としています。県内には約3300のため池があり、カメ類の重要な生息場所となっています。普段見かけることが多いカメを中心に見分け方や生態について解説します。

クサガメ（外来種）

ため池や河川で普通に見られるカメです。背甲には3本の隆起（キール）があり、頭部と側頭部には3本程度の黄色の縞模様が見られます。ただし、成熟したオスは黒化することが多く、センターで実施した調査では背甲長が14㎝程度まで成長したオスは殆どが黒化個体になっています。

かつては在来種とされていましたが、近年の研究結果により江戸時代以降に中国や朝鮮半島から持ち込まれた外来種であることが明らかになっています。

ニホンイシガメ（在来種）

県内に広く分布していますが、本種が優占種となるような地域は非常に限定的です。クサガメと異なり背甲は黄色から黄褐色で背中に1本の隆起があるのみです。また背甲後縁はギザギザになります。産卵に必要な条件である河川と陸域の連続性が失われたこと等による生息環境の悪化や、販売目的での乱獲等により個体数が急激に減少しています。そのため、愛媛県RDBでは絶滅危惧Ⅱ類に区分されています。

クサガメとニホンイシガメの交雑個体

クサガメとニホンイシガメは種が異なりますが、稀に交雑することが分かっています。交雑した個体は「ウンキュウ」と呼ばれ、その希少性から愛玩目的で販売されていました。近年、愛媛県の自然条件下においても少数ではあるものの複数の交雑個体が確認されるようになりました。交雑個体は稔性（次世代を生産する能力）を持つため、不可逆的な遺伝子攪乱を生じさせる恐れがあります。外見上はクサガメとニホンイシガメの両方の特徴を有していますが、一律ではありません。

ニホンスッポン（在来種）

県下の河川やため池に生息しています。甲羅干しのために陸域で確認されることは多いのですが、水中で過ごすことが多いため詳細な生息状況は不明です。古くから食用とされていることから養殖由来の個体も含まれる可能性があります。県内の河川で5月に交尾する個体が確認されています。捕獲された大型個体がカミツキガメと間違われる事例もあります。

アカミミガメ（外来種）

愛媛県で確認されるアカミミガメは、亜種であるミシシッピアカミミガメが殆どで、県内の河川、ため池を中心に広く定着しています。また野外で幼体も確認されていることから遺棄個体だけではなく、野外繁殖個体も多数生息していると考えられます。側頭部に赤い斑紋があるのが特徴ですが、この赤い斑紋部分に耳はありません。県内で一般的に見られるクサガメと比較して産卵回数、産卵数共に多いため、本種が優占種となっている場所も多くみられます。成熟したオスは側頭部の赤い斑紋や背甲の模様が消失して別種と見間違うような外観になることがあります。

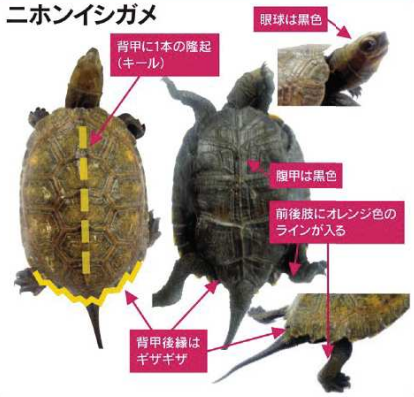
カメの特徴と見分け方

クサガメとニホンイシガメの違いを紹介します。

クサガメ

★マーク
老齢のオスは黒化し、この特徴が無くなります。

ニホンイシガメ



愛媛県の希少野生動植物 オオキトンボ

今回は、黄金色に輝くトンボ、オオキトンボ*Sympetrum uniforme*（Selys, 1883）を紹介します。オオキトンボは、体長50mm程度の、アカネ属（アカトンボ）の仲間です。“オオキトンボ”という名前は、大きくて黄色いトンボという意味ですが、その名の通り、アカネ属の中ではもっとも大きい種類で、体は橙色一色で斑紋がなく、翅も一様に橙色をしています。本種は主に、浮葉植物が少なく水面が開けた、秋から水を抜く平地のため池（皿池）に生息、6月初旬～8月下旬に羽化します。羽化した成虫は、夏の間はため池から離れる為、その間の発見事例は少ないですが、山腹～山頂で過ごしていると考えられています。その後、ため池の水位が下がりはじめる9月中旬になると、交尾・産卵をする為に、成熟した成虫がため池に戻ってきます。産卵は、主に午前中に観察されますが、池干しで水位が下がったことにより露出した砂泥と水面との境目に、♂と♀が連結した状態で行われ、夜間はため池周辺の草地等で休止することが確認されています。

オオキトンボは全国的にとても珍しく、環境省レッドデータブックでは絶滅危惧IB類、愛媛県では絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。2018年11月現在、国内で生息が確認されているのは、愛媛を含む8府県だけで、海外では朝鮮半島、中国、ロシアに生息しています。近年は、ため池の護岸改修により産卵が難しくなったことや、池干しをしなくなったことなどにより、全国的に減少していますが、愛媛県は比較的安定した生息地が残されています。生物多様性センターでは、2017年より、オオキトンボの保全に向けた生活史調査を、NPO森からつづく道と共同で行っています。

縄張りをはるオオキトンボ♂愛媛県内
2016年10月10日　武智礼央撮影

オオキトンボ連結産卵　愛媛県内
2009年10月23日　高橋史朗撮影

参考文献／ 久松定智, 2018. 愛媛県におけるオオキトンボの保全活動について. 昆虫と自然, 53(5): 22-25.
久松定智・武智礼央・村上裕・黒河由佳・松井宏光, 2018. 絶滅危惧種オオキトンボ（トンボ目, トンボ科）の発生消長調査. 愛媛県立衛生環境研究所年報, (19): 23-27.

紹介 愛南探検隊

愛南探検隊は、愛南町の豊かな自然を次世代に受け継いでいくため、2015年12月に設立された団体で、生き物探しやいいとこ探しなどの体験・実践活動に取り組んでいます。構成員は現在45名で、生物多様性センターが実施したコガタノゲンゴロウ（愛媛県特定希少野生動植物）の調査で集まったボランティアの地元の子供たちとその保護者が中心です。

愛南探検隊のモットーは「自然にふれあう・調べる・楽しむ！」で、「愛南町まるごと自然ミュージアム」を目指して活動しており、自然や生物が大好きで愛南町の生物多様性を保全する人材が育つように、バードウォッチングやアサギマダラの標識調査などを月1回町内で実施しています。2018年からは、生物多様性センターと一緒に、コガタノゲンゴロウの定点調査も開始しました。今後も、ますますのご活躍を期待しています。

編集・発行
愛媛県立衛生環境研究所　生物多様性センター
〒790-0003　愛媛県松山市三番町8丁目234
TEL 089-931-8757　FAX 089-934-6466
URL：https://www.pref.ehime.jp/h25115/biodiversity
Mail：seibutsu-cnt@pref.ehime.lg.jp

編集後記

SMAPの「世界に一つだけの花」という歌がありますが、表紙で紹介した「トキワバイカツツジ」はまさに世界中で愛媛だけの花。

また今春には新居浜市銅山峰に自生するツツジ科の植物「ツガザクラ」が国の天然記念物に指定される見込みです。

愛媛のお宝、みんなで大切に守りましょう。